

高等学校 学習評価に関する参考資料

目標に準拠した観点別学習状況評価を進めるために

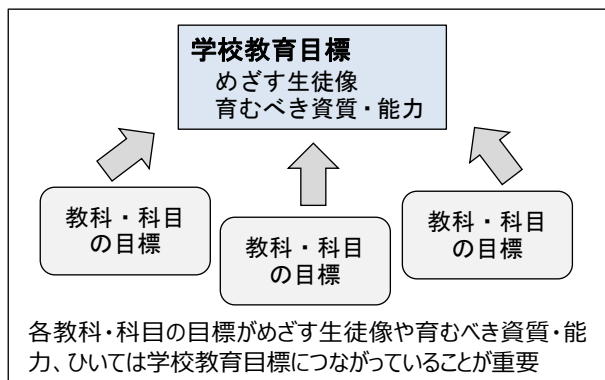
平成 29 年 3 月
大阪府教育センター

1. 学習評価を進めるための手順

(1) 学校教育目標と各教科・科目の目標

各学校においては、生徒の実態やそれぞれの学校、地域の実態などを踏まえて、学校教育目標が定められていることと思います。さらにはそれを踏まえて、めざす生徒像や生徒に育むべき資質・能力が目標として設定されているでしょう。その目標に向かって、各教科・科目が何をどのように育てていくのかという目標を設定することが重要です。

一般的に学校教育目標はかなり抽象的な内容になっていますが、各教科・科目の目標はそれを具現化するものであるとも言えます。

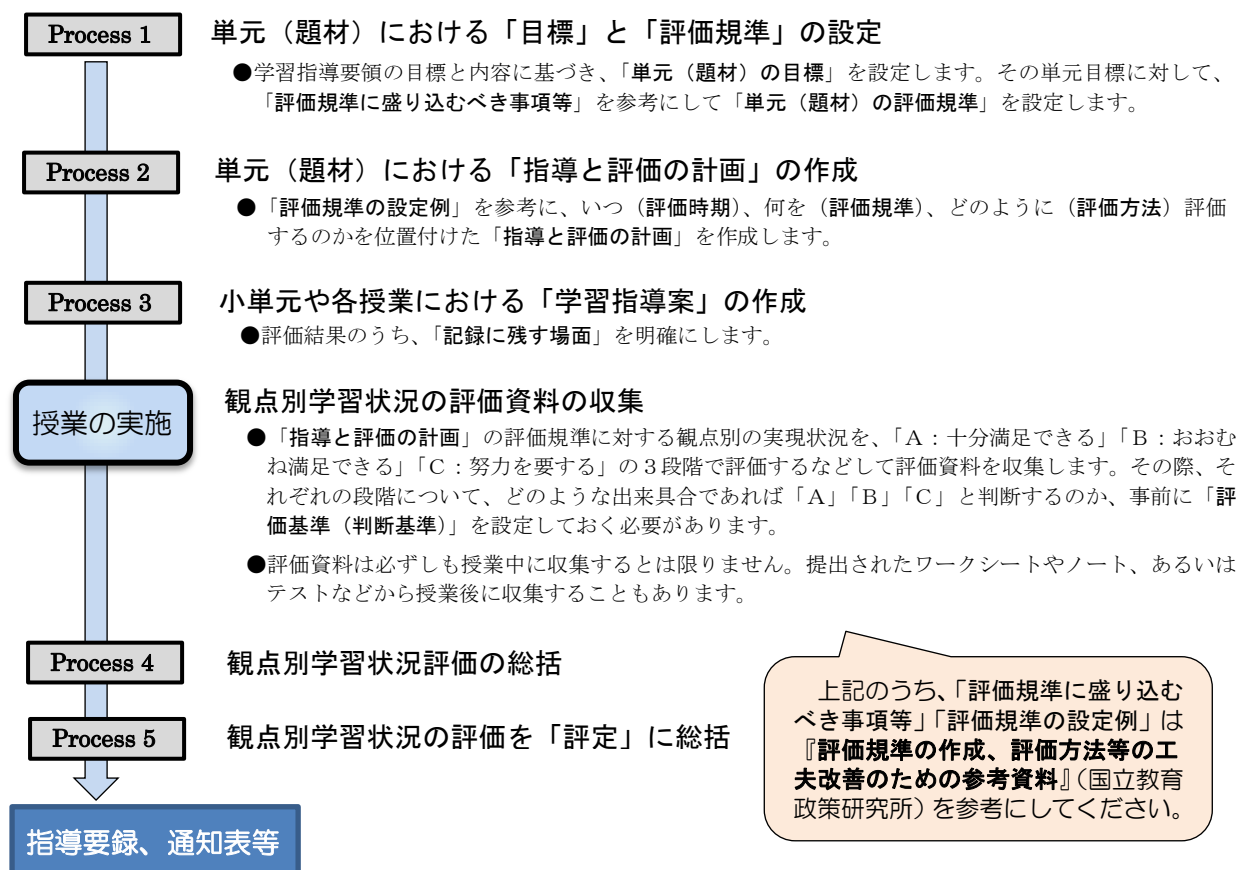


(2) 各教科・科目の目標の設定

学校教育目標の達成に向けた各教科・科目の目標は高校生活全体での大きな目標があり、それをめざした各学年の目標、さらに単元(教材)の目標と学習過程が細分化されていきます。そして細分化されるにつれて、目標はより具体化していきます。

(3) 学習評価の過程

単元(題材)における目標の設定から、学年末の評定の総括に至るまでには次のような過程が考えられます。各プロセスの詳細については次ページ以降に記載してあります。



2. 学習評価の具体的な進め方

(1) 単元（題材）における「目標」と「評価規準」の設定 Process 1

学習指導要領の目標と内容に基づき、生徒の実態等を踏まえて、単元目標を設定します。その単元目標に対して、「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」（国立教育政策研究所）を参考にするなどして、単元（題材）の評価規準を設定します。その際、単元（題材）の「目標」のポイントとなる部分を評価する評価規準を設定することが大切です。

● 「単元目標」「内容」と評価規準の設定例：数学Ⅰ (1) 数と式

◇表1 学習指導要領の目標と内容

内容のまとめり 単元	(1)数と式 ア 数と集合	目 標	数と式について理解させ、基礎的な知識の習得と技能の習熟を図り、事象を数学的に考察する能力を培い、数学のよさを認識できるようにするとともに、それらを活用する態度を育てる。
		内 容	(ア) 実数 数を実数まで拡張する意義を理解し、簡単な無理数の四則計算をすること。 (イ) 集合 集合と命題に関する基本的な概念を理解し、それを事象の考察に活用すること。

「学習指導要領」第4節 数学 ●第2款 各科目 第1 数学Ⅰ

◇表2 「(1) 数と式」の評価規準に盛り込むべき事項

関心・意欲・態度	数学的な見方や考え方	数学的な技能	知識・理解
数と集合及び式に関心をもつとともに、数学のよさを認識し、それらを事象の考察に活用しようとしている。	事象を数学的に表現して考察したり、式を多面的に見たりして事象の考察に活用することができる。	簡単な無理数の計算をしたり、与えられた命題から新たな命題をつくったり、数量の関係を式で表現して的確に処理したりすることができる。	数と集合及び式における基本的な概念、原理・法則などを理解し、知識を身に付けている。

「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（高等学校 数学）」

◇表3 「(1) 数と式 ア 数と集合」単元（題材）の評価規準設定例

a：関心・意欲・態度	b：数学的な見方や考え方	c：数学的な技能	d：知識・理解
【実数】 ・数の体系を拡張する過程や数の四則計算に関心をもち、それらを数の考察に活用しようとしている。	・数を拡張してきた過程を考察することができる。 ・数の四則計算の可能性について考察することができる。	・簡単な無理数についての四則計算ができる。	・数を実数まで拡張することの意義を理解している。 ・実数が直線上の点と1対1に対応していることを理解している。
【集合】 ・集合の包含関係と命題を関連付けて捉え、それらを命題の考察に活用しようとしている。	・ベン図などを用いて数学の対象を整理しそれらを多面的・統合的に見ることができる。 ・事象を命題として表現し、考察することができる。	・与えられた二つの集合の共通部分や和集合、補集合などを求めることができる。 ・簡単な命題やその命題の逆・裏・対偶について真偽を証明することができる。	・集合に関する基本的な用語・記号を理解している。 ・命題の必要条件・十分条件、逆・裏・対偶などを集合と関連付けて理解している。

「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（高等学校 数学）」

「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」では、学習指導要領の目標・内容に従って、内容のまとめりの評価規準に盛り込むべき事項が設定されています（表2）。さらにそれを踏まえて、各単元（題材）にその事項を反映した評価規準が設定されています（表3）。

各校では生徒の実態などに基づき、それぞれの単元（題材）の評価規準を設定してください。

(2) 単元(題材)における「指導と評価の計画」の作成 Process 2

単元(題材)の「目標」と「評価規準」を設定した後、単元(題材)の学習過程を考慮しながら、いつ(評価時期)、何を(評価規準)、どのように(評価方法)評価を行うのかを示した「指導と評価の計画」を作成します。

「指導と評価の計画」を作成する際には、次の点に留意する必要があります。

- ・学習指導要領及び同解説、「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」を踏まえ、学習内容に対して具体的に作成する
- ・年間の学習の流れ(指導と評価の年間計画-シラバス)を見通して、単元(題材)を適切に位置づける
- ・各単元(題材)の目標を明確にし、毎時間の授業の目標が単元(題材)の目標につながっている
- ・評価に追われ、指導に支障をきたすことがないように、1時間の授業において評価する観点を絞り込み、実行可能な評価にする

◇数学Ⅰ 単元「数と集合」の「指導と評価の計画」例

学習内容 (小単元)	主な学習活動	a : 関心・意欲・ 態度 <評価方法>	b : 数学的な見方 や考え方 <評価方法>	c : 数学的な技能 <評価方法>	d : 知識・理解 <評価方法>
実数	1 有理数と無理数	○ <観察>		○ <ワークシート>	○ <確認テスト> <定期考査>
	2 数直線と絶対値				○ <確認テスト> <定期考査>
	3 平方根の性質・ 根号を含む式の 計算			○ <確認テスト> <定期考査>	
	4 分母の有理化			○ <確認テスト> <定期考査>	
	5 まとめ	○ <ワークシート>	○ <ワークシート> <定期考査>		
集合					

生徒が「A：十分満足できる」「B：おおむね満足できる」「C：努力を要する」のいずれの状況であるかを判断し、記録をとります。

評価の記録は授業中だけで行うとは限りません。授業終了時に提出するノートやワークシート、授業後の確認テストや単元テスト、さらには定期考査で評価することも考えられます。

コラム 1 目的に応じた「評価」の機能

ひとくちに「評価」と言ってもその目的に応じて使い分けをすることがあります。新しい教育内容を教えるにあたって必要となる学力や生活体験を把握するもの(診断的評価)、生徒の学習や教師の授業改善などに生かすためのもの(形成的評価)、そして授業など教育活動の効果や有効性を測り、生徒の成績や認定の主たる材料となるもの(総括的評価)です。

評価する時期もそれぞれの目的に応じて異なります。一般的に診断的評価は、学習が開始される前に、形成的評価は学習の途上に、そして総括的評価は単元、学期末、年度末など、ある一定の期間において実施されます。授業改善のための評価は日常的に行われることが重要である、といわれますが、これは形成的評価をさします。

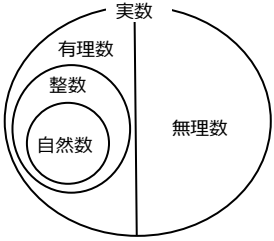
(3) 小単元や各授業における「学習指導案」の作成 **Process 3**

日々授業を行う中で、毎時間、精緻な「学習指導案」を作成する必要はありません。ポイントとして次のような点に留意してください。

- ・単元全体の中で、本時の授業はどのように位置づいているのか（本時の目標と単元目標の関係）
- ・本時の授業全体をどのように展開するのか（学習活動と指導上の留意点）
- ・生徒の何をどのように評価して記録に残すのか（評価規準と評価方法）

◇数学Ⅰ 単元「数と集合」（学習内容「実数」）の「学習指導案」例

【本時の目標】 数の拡張について理解し、数の分類や循環小数の表現ができるようになる。

	学習活動	指導上の留意点	評価規準<評価方法>
導入	○今まで使ってきた数について考える (例) 1、-2、 $\frac{1}{3}$ 、0.25、0.333…、 $\sqrt{3}$ 、 π など	・「一辺の長さが1である正三角形の面積は？」といった発問をしながら、多様な種類の数を生徒から引き出すようにする。	【a：関心・意欲・態度】 <観察>
展開	○導入で出された数を用いて種類分けを行う (問い) 数を4つに仲間分けしてみよう 一人で考える →ペアで考える →グループで考える ○数について理解する 分類の根拠を基に数の特徴を理解し、整理する  ○循環小数の表し方について理解する (問い) 分数を小数で表してみよう (例) $\frac{2}{3}$ 、 $\frac{6}{11}$ 、 $\frac{25}{22}$ 、 $\frac{7}{27}$ など	・根拠を伴って分類させる。 ・机間指導により支援する。 ・それぞれの数の特徴を理解させる。 ・「数の分類」の図に導入で出された数を当てはめていく。 ・循環小数の特徴と表し方を理解させる。	【c：数学的な技能】 <ワークシート>
まとめ	○本時のまとめを行う 分かった内容を表現する →数の分類を行う、分数を循環小数で表す	・生徒に授業の振り返りをさせる。 ・振り返りシートを記入させる。ワークシートと共に提出させる。 ・成果物により評価する。	

コラム 2 本時の目標と単元目標

単元を学習し終えた段階で、どのようなことができる生徒の姿をイメージするのか、具体的に設定することが大切です。

単元目標を達成するためには、知識・技能、考え方、表現方法などを習得する必要があり、それが毎時の目標となります。

毎時の目標達成状況を確認しながら、当初の指導計画を微修正し、単元目標に迫っていく必要があります。各授業時の目標が単元目標に結びついていなければなりません。



(4) 授業の実施と観点別学習状況の評価資料の収集

授業の実施

ア. 3段階の評価

「指導と評価の計画」の評価規準に対する実現状況を、「A：十分満足できる」「B：おおむね満足できる」「C：努力を要する」の3段階で評価します。

評価の信頼性を高めるため、それぞれの段階について、どのような出来具合であれば「A」「B」「C」と判断するのか、学習の到達段階を3段階に分けて、具体的に示した「判断基準（評価基準）」を設定する必要があります。

イ. 評価の記録

収集した評価材料は観点別の総括や評定に活用しやすいように、表計算ソフトなどで蓄積すると便利です。その際には、Aを3点、Bを2点、Cを1点などのように点数化しておくことも考えられます。

評価はあらかじめ指導と評価の計画で設定した観点について実施し、記録します。しかし、評価はしても単元の総括の資料としない場合もあります。これは適切な働きかけや指導のてだてを特に重視するためです。

◇指導と評価の計画例（物理基礎 単元名：波）

時	学習活動	ねらい	評価の観点				評価規準	評価方法
			関	思	技	知		
5	波の反射と重ね合わせ	・自由端反射、固定端反射を観察する。		○			波の反射及び入射波と反射波によってできる定在波について、その特徴を見だし、科学的に判断し、表現している。	ワークシートの記述内容の分析 小テスト
		・入射波と反射波による定在波を考察する。				◎	自由端反射、固定端反射について反射波の特徴及び入射波と反射波によってできる定在波の特徴を理解し、知識を身に付けている。	

◎印の付いた評価規準：評価規準に照らして、「十分満足できる」状況（A）が、「おおむね満足できる」状況（B）から、「努力を要する」状況（C）かを把握し、単元の総括の資料とする。

○印の付いた評価規準：評価規準に照らして、「おおむね満足できる」状況（B）であるかどうかを中心に把握する。「努力を要する」状況（C）になりそうな生徒に対して、適切な働きかけや指導のてだてを行うことを特に重視したもので、単元の総括の資料とはしない。

「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（高等学校 理科）」より

コラム 3 観点別学習状況の評価の実際

学習評価については、「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）」（平成 22 年 5 月 11 日 文部科学省初等中等教育局長）において示されています。同通知では、高等学校における観点別学習状況の評価として、上記の「A」「B」「C」によって行うこと

を明示しているわけではありませんが、基本的な考え方は小・中学校と同じになると考えられています。「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」（国立教育政策研究所）の評価の事例は上記の表記によっています。

【参考】「改善通知」に示された中学校生徒指導要録における観点別学習状況の記入方法

（学習指導要領に示す必修教科の取扱いは次のとおり）

【各教科の学習の記録】

I 観点別学習状況（小学校児童指導要録と同じ）

新しい学習指導要領に示す各教科の目標に照らして、その実現状況を観点ごとに評価し、次のように記入する。

- 「十分満足できる」状況と判断されるもの・・・・・・・・・・ A
- 「おおむね満足できる」状況と判断されるもの・・・・・・・・・・ B
- 「努力を要する」状況と判断されるもの・・・・・・・・・・ C

(5) 観点別学習状況の評価の総括 **Process 4**

ア. 評価情報を観点別に総括する方法

評価した情報を蓄積し、観点別の総括していく方法としては、評価規準ごとに「十分満足できる」状況（A）、「おおむね満足できる」状況（B）、「努力を要する」状況（C）で記録していくことが考えられます（「コラム3」参照）。

複数蓄積されたA～Cの観点を最終的に総括する方法は次の二つが考えられます。

i) 評価結果のA、B、Cの個数をもとに総括する

評価結果のA、B、Cの数が多いものがその観点の学習の実現状況をもっともよく表しているという考え方に立つ総括方法です。

〔例〕

観点	評価	評価の総括
関心・意欲・態度	A A B A	A
思考・判断・表現	B B A B	B
技能	A B B B	B
知識・理解	B A A A	A

※「A A B B」のように同数の場合や「A B C」などのように三つの記号が混在する場合の総括の方法をあらかじめ決めておく必要があります。また、同じ観点を評価する際に学習内容に応じて評価の重み付けをすることも考えられます。例えば、「関心・意欲・態度」の観点について、学習の深まりにつれて関心・意欲が高まっていくという点に留意し、「B B B A」の総括を「A」とすることなどが考えられます。

ii) 評価結果のA、B、Cの数値化することで総括する

「A = 3点、B = 2点、C = 1点」のように数値化して、合計したり、平均したりして総括します。

このとき、AとB、BとCの境界の基準値としてAとBの平均（2.5）をAとBを判断するための基準値とし、BとCの平均（1.5）をBとCを判断するための基準値とするなどの措置が必要です。

〔例〕

観点	評価	平均	評価の総括
関心・意欲・態度	A (3) A (3) B (2) A (3)	2.75	A
思考・判断・表現	B (2) B (2) A (3) B (2)	2.25	B
技能	A (3) C (1) A (3) B (2)	2.25	B
知識・理解	B (2) A (3) C (1) B (2)	2.00	B

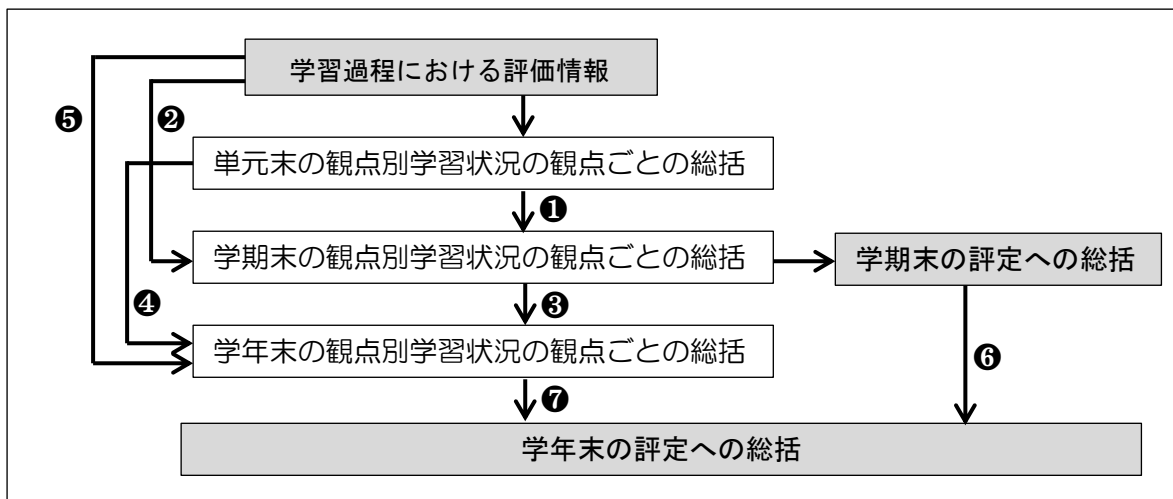
「A」：(平均値) > 2.5 「B」：1.5 ≤ (平均値) ≤ 2.5 「C」：(平均値) ≤ 1.5

※学習内容に応じて評価の重み付けをする場合は、例えば、重みを付けたい評価の場面について「A = 6点、B = 4点、C = 2点」や「A = 4点、B = 2点、C = 0点」とすることが考えられます。

イ. 観点別学習状況評価の観点ごとの総括

学習過程において収集した評価情報は観点別に総括し、最終的には5段階の評定に総括することになります。その流れは下記のようにいくつか考えられます。

※「学習過程」とは授業や授業後に確認テスト、単元テスト、定期テストなど評価にかかわる学習を行う過程をさします。



観点別学習状況の評価及び評定への総括の流れ

i) 単元における評価の総括

観点別に総括する際、単元において、評価機会が1回の場合は、その評価が単元における評価となります。評価機会が複数回（2回以上）の場合は、6ページのAの方法と同様であると考えられます。

【例1】評価結果のA、B、Cの個数をもとにする場合

	評価の機会			単元の評価
	①	②	③	
関心・意欲・態度	A	B	A	A
思考・判断・表現	B	B	A	B
技能	C	B	A	B
知識・理解	A	B	B	B

【例2】評価結果のA、B、Cを数値化する場合

	評価の機会			単元の評価
	①	②	③	
関心・意欲・態度	A (3)	B (2)	A (3)	2.7 ⇒ A
思考・判断・表現	B (2)	B (2)	A (3)	2.3 ⇒ B
技能	C (1)	B (2)	A (3)	2.0 ⇒ B
知識・理解	A (3)	B (2)	B (2)	2.3 ⇒ B

A：3点、B：2点、C：1点と換算

「A」：(平均値) > 2.5 「B」：1.5 ≤ (平均値) ≤ 2.5 「C」：(平均値) ≤ 1.5

※学習内容に応じて評価の重み付けをする場合は、例えば、重みを付けたい評価の場面について「A=6点、B=4点、C=2点」や「A=4点、B=2点、C=0点」とすることが考えられます。

ii) 学期末における観点ごとの評価の総括

学期末における観点ごとの評価の総括は、単元（題材）ごとに総括した観点ごとの評価結果を基に行う場合（①）と、学習過程における評価情報から総括する場合（②）が考えられます。なお、総括の方法は6ページの「ア」の方法と同様であると考えられます。

iii) 学年末における観点ごとの評価の総括

学年末における観点ごとの総括については、学期末に総括した観点ごとの評価結果を基に行う場合（③）と、単元（題材）ごとに総括した観点ごとの評価結果を基に行う場合（④）などが考えられます。なお、総括の方法は6ページの「ア」の方法と同様であると考えられます。

〔例1〕各学期末の観点別学習状況の評価の総括を基に行った、学年末における観点別学習状況の評価の総括（各観点で表れたA、B、Cの数で判断）

	単元				1学期末 観点別学 習状況評 価の総括	→		1 学 期	2 学 期	3 学 期	学年末 観点別学 習状況評 価の総括
	I	II	III	IV							
関心・意欲・態度	A	B	B	B	B		B	C	C	C	
思考・判断・表現	B	A	A	A	A		A	A	B	A	
技能	B	B	A	C	B		B	A	B	B	
知識・理解	B	A	A	A	A		A	B	B	B	

各単元の観点別学習状況評価の総括を基に、1学期末における観点別学習状況の評価の総括を行う。

各学期の観点別学習状況の評価の総括を基に、学年末における観点別学習状況の評価の総括を行う。

〔例2〕各単元で総括した観点別学習状況の評価を基に行った、学年末における観点別学習状況の評価の総括（評価結果を数値化して平均値で判断）

	単元							観点別の 平均値	学年末 観点別学 習状況評 価の総括
	I	II	III	IV	V	VI	VII		
関心・意欲・態度	A (3)	B (2)	B (2)	B (2)	B (2)	B (2)	A (3)	2.3	B
思考・判断・表現	B (2)	A (3)	A (3)	A (3)	A (3)	A (3)	B (2)	2.7	A
技能	B (2)	B (2)	A (3)	C (1)	B (2)	B (2)	B (2)	2.0	B
知識・理解	B (2)	A (3)	A (3)	A (3)	B (2)	B (2)	A (3)	2.6	A

- ① A：3点、B：2点、C：1点と換算
- ② 単元I～VIIまでの合計得点を単元数で割り、平均値を算出
- ③ 「判断基準」を設定して、平均値により評価を行う
 「A」：(平均値) > 2.5 「B」：1.5 ≤ (平均値) ≤ 2.5 「C」：(平均値) ≤ 1.5

※学習内容に応じて評価の重み付けをする場合は、例えば、重みを付けたい評価の場面について「A = 6点、B = 4点、C = 2点」や「A = 4点、B = 2点、C = 0点」とすることが考えられます。

ウ. 定期考査の扱い（学期末の観点別学習状況の評価における観点ごとの総括）

定期考査（ペーパーテスト）は、評価方法の一つとして有効ですが、そこで得られる結果が目標に準拠した評価における学習状況のすべてを表すものではありません。また、評価時期が学期末などに偏ることのないよう、評価の時期や評価の場面について工夫することが考えられます。

定期考査の結果に重みを付けて学期の評定に総括する場合、まず、定期考査の問題について、学習状況の評価方法を「定期考査による」とした内容にしたがって、問題を観点別に割り振るようにします。

そのうえで、定期考査において評価の難しい「関心・意欲・態度」等の観点を、定期考査以外において評価します。そして、定期考査の結果と単元ごとの評価に基づき「評定」に総括していきます。

ここでは、各単元及び定期考査の場面で主な評価の観点の以下のとおり設定した場合の学期における評定の総括について、二つの方法を示します。

	単元 I	単元 II	中間考査	単元 III	単元 IV	期末考査
関心・意欲・態度	○	○	○	○	○	○
思考・判断・表現	○					
技能				○		
知識・理解	○					

※定期考査においては、各単元で「○」の表示のない観点についても評価できるよう工夫します。また、各教科の特性にてらし、必ずしも4観点すべての観点を定期考査で評価する必要はありません。

i) 評価結果のA、B、Cの個数をもとに総括する

評価結果のA、B、Cの数が多いものがその観点の学習の実現状況をもっともよく表しているという考え方を基本にしつつ、定期考査と定期考査以外の評価について観点ごとにたてた重み付けの方針にしたがって総括します。

〔例〕

	関心・意欲・態度						思考・判断・表現				技能			知識・理解					
	単元 I	単元 II	中間考査	単元 III	単元 IV	期末考査	観点総括	単元 I	中間考査	期末考査	観点総括	中間考査	単元 III	期末考査	観点総括	単元 I	中間考査	期末考査	観点総括
生徒X	C	C	A	B	C	A	C	A	C	B	B	B	A	B	B	C	A	A	A
生徒Y	A	B	C	A	B	C	B	B	C	B	B	C	C	B	C	C	B	A	B
生徒Z	B	A	C	A	A	C	A	A	B	A	A	B	B	A	B	A	B	C	B

※この〔例〕では、定期考査において4観点すべての観点を評価したものとします。

※観点ごとの総括の際にたてた重み付けの方針は以下のとおりです。

- 「関心・意欲・態度」については、単元ごとの評価を基本に、定期考査での結果を加味
- 「思考・判断・表現」「技能」については、3回の評価の機会を均等に総括
- 「知識・理解」については、考査の結果を基本に単元での評価を加味

ii) 評価結果を数値化して総括する

ここでは、定期考査の結果に重みを付けて学期の「評定」に総括する配点例を2例示します。

【例1】定期考査以外による評価の割合を20%とした場合の配点例

	単元 I	単元 II	中間考査	単元 III	単元 IV	期末考査	合計点	評定
関心・意欲・態度	3	3	40	3	3	40	100	5
思考・判断・表現	3							
技能				3				
知識・理解	2							

- ① A：3点、B：2点、C：1点と換算（知識・理解はA：2点、B：1点、C：0点と換算）
- ② 定期考査では、各教科の特性にてらし、必ずしも4観点すべての観点を評価する必要はない
- ③ 各学校の内規にしたがって評定を決定

【例2】定期考査以外による評価の割合を30%とした場合の配点例

	単元 I	単元 II	中間考査	単元 III	単元 IV	期末考査	合計点	評定
関心・意欲・態度	3	6	35	3	6	35	100	5
思考・判断・表現	3				3			
技能				3				
知識・理解	3							

- ① A：3点、B：2点、C：1点と換算（単元IIと単元IVの関心・意欲・態度には2倍の重みを付けて評価する）
- ② 定期考査では、各教科の特性にてらし、必ずしも4観点すべての観点を評価する必要はない
- ③ 各学校の内規にしたがって評定を決定

観点別学習状況の評価について、各教科の①単元（題材）における指導と評価の計画の留意点、②単元（題材）の評価規準の設定、③単元（題材）における評価方法の選択と組み合わせ、④具体的な生徒の学習状況、⑤観点ごとの総括などについては、「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」（国立教育政策研究所 教育課程研究センター）に示されているので参考にしてください。

また、観点別学習状況の評価の趣旨を踏まえた学習評価を行う際には、成績付けのための評価にとどまるのではなく、授業の改善につながるよう努力してください。

(6) 「評価」への総括 **Process 5**

評価が各教科・科目の目標や内容に照らして、学習の実現状況を総合的に評価するものであるのに対し、観点別学習状況の評価は各教科・科目の目標や内容に照らして、学習の実現状況を分析的に評価するものです。観点別学習状況の評価は評価に総括するための基本的な要素となります。

ア. 各教科・科目の評価の記入方法

高等学校生徒指導要録における評価の記入方法は次のとおりです。

[各教科・科目の学習の記録]	
(1) 各教科・科目の評価	
学習指導要領に示す各教科・科目の目標に基づき、学校が地域や生徒の実態に即して定めた当該教科・科目の目標や内容に照らして、その実現状況を総合的に評価し、次のように区別して記入する。	
「十分に満足できるもののうち、特に程度が高い」状況と判断されるもの	5
「十分満足できる」状況と判断されるもの	4
「おおむね満足できる」状況と判断されるもの	3
「努力を要する」状況と判断されるもの	2
「努力を要すると判断されるもののうち、特に程度が低い」状況と判断されるもの	1

(参考) 小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について(通知)(平成22年5月11日 文部科学省)

イ. 学年末の「評価」への総括

観点別学習状況の評価を「評価」に総括するにはいくつかの方法が考えられます。

i) 観点別学習状況の評価の総括の組み合わせで「評価」に総括

[例]

A、B、Cの組み合わせ	評価
AAAAの中で特に程度が高いもの	5
AAAA、AAAB、AABB	4
AABB、AAAC、ABBB、AABC、ABBC、BBBB、AACC、BBBC	3
AACC、BBBC、ABCC、BBCC、BCCC、CCCC	2
CCCCの中で一層努力を要するもの	1

例えば「AAAA」となった場合、それぞれのAにどのような評価情報が付加されているかによって、5か4かを判断する必要があります。そのための方法や手続きをあらかじめ決めておかなければなりません。

ii) 各観点別学習状況の評価の総括を数値化したものに基づき「評価」に総括

次の例は、「技能」に1.5倍の重み付けをしています。

[例]

観点	学期末の観点別学習状況の評価の総括	観点別学習状況の評価の得点 (「技能」は1.5倍)	観点を得点の平均値	評価
関心・意欲・態度	B (3)	3	$(3+5+4.5+5)/(1+1+1.5+1)$ =3.9	4
思考・判断・表現	A (5)	5		
技能	B (3)	3×1.5		
知識・理解	A (5)	5		

- ① 学期末(学年末)の観点別学習状況の評価について、A=5、B=3、C=1とする
- ② 「技能」には1.5倍の重みを付けたうえで、観点別学習状況の評価の得点の平均値を求める
- ③ 「判断基準」を設定して、平均値により「評価」を判断する
 「5」: (平均値) ≥ 4.5 「4」: 3.5 ≤ (平均値) < 4.5 「3」: 2.5 ≤ (平均値) < 3.5
 「2」: 1.5 ≤ (平均値) < 2.5 「1」: (平均値) < 1.5

iii) 各学期で数値化した評価に基づき「評定」に総括

各学期で総括した「評定」をもとに学年末の「評定」に総括する方法と、各学期で評定に総括する際に算出した「合計点」をもとに学年末の「評定」に総括する方法があります。

コラム 4

「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」

現在、国では新しい学習指導要領に向けた審議が進められています。その中では、これまでの中心であった「何を学ぶのか」という指導内容の見直しに加えて、「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」という視点も重要視されています。

生徒が学ぶべき内容を精査するとともに、学びの質を高めていくことが求められることとなります。すなわち、質の高い学びを実現する授業が必要であり、そのため、不断の授業改善が重要です。生徒の学習状況を確認しながら指導（授業）のあり方を常に振り返る営みが大切です。

生徒が個別の知識や技能を「知っている」レベルであるのか、概念の意味を「わかっている」レベルであるの

か、あるいは、学習した知識や技能を現実の世界で「使える」レベルであるのか、ということ捉えていかなければなりません。

生徒が学んだ知識や技能を積極的に「使う」ようにするためには、主体的に学び、そして学びの中で他者と関わり合っていくことが必要となります。そうすることで生徒一人一人の学びが深くなっていきます。

生徒がどれだけ学んでいるのか、どれだけ理解しているのか、そして学んだ知識・技能をどれだけ使っているのかということ把握するためにも分析的な評価が必要となります。観点別学習状況の評価を、ぜひ生徒の学びの深まりに活用してください。

3. 妥当性・信頼性の高い評価を行うために

(1) 学習評価の妥当性・信頼性

学習評価は、「評価する人」「評価される人」「評価を利用する人」が、互いにおおむね妥当である（評価結果が評価の対象である資質や能力を適切に判断しているものである）と判断できるよう信頼性のある評価を工夫していくことが大切です。そのためには、次のことが求められます。

- ・指導の目標及び内容と対応した「評価規準」の設定
- ・「評価方法」が、評価の観点で示される資質や能力の評価にふさわしい
- ・生徒の学習の実現状況（「十分満足できる（A）」「おおむね満足できる（B）」「努力を要する（C）」）のとらえ方が、教員間で共通認識されている
- ・評価の観点ごとの総括や「評価」への総括方法等が教員間で共通認識されている

(2) 学校における組織的な取組の推進

ア. 校内研修の充実

評価の妥当性や信頼性を高めるためには、学校全体として統一された明確な考え方をもち、すべての教員が、評価の方針、方法、体制、結果等について、共通理解を図るとともに、教員一人一人の評価の力量を向上させていくことが大切です。

そのためには、校内研修を実施し、評価活動の不断の見直しや改善を図ることが重要です。

【校内研修における研修課題の例】

- ◇評価規準及び評価方法
- ◇観点別学習状況の評価の総括や「評定」への総括のあり方
- ◇評価作業の効率化の検討
- ◇観点を意識したテスト問題の検討
- ◇生徒や保護者への評価の仕組みや結果についての説明のあり方
- ◇評価結果から評価方法や「評定」への総括等についての再検討

イ. 評価基準を共通認識し、教員個々の評価スキルを高めるためのワークショップ

校内研修の例：評価スキルを高めるためのワークショップ

【研修のねらい】

教員の評価のスキルを高め「判断（評価）基準」の共通理解を図る。

【期待できる効果】

- ・複数の教員で評価の着眼点や「判断（評価）基準」をすり合わせることにより、「判断（評価）基準」の共通理解を深めることができ、評価の信頼性を高めることができる。
- ・生徒の実態から評価規準を検討することができ、評価規準の改善を図ることができる。

【研修の実際】

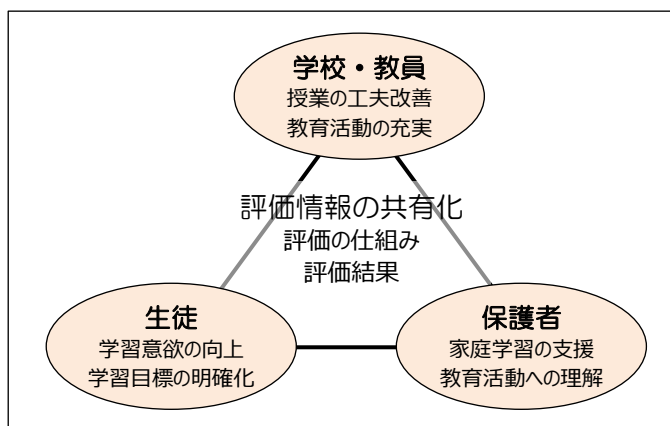
- ① 授業後の評価資料（生徒のノート、ワークシート、作品等）を一定数集める
- ② あらかじめ、評価の観点を確認しておく
- ③ お互いの採点がわからないように評価資料を採点する
（例）「素晴らしい」：5、「合格」：3、「より指導が必要」：1、迷ったら2か4
- ④ すべての資料を検討し終わった後で、全員が同じ点数を付けたものを選び出し、その資料に見られる特徴や採点した理由を話し合い、記述する

4. 生徒や保護者の理解の促進

評価を学習の改善に生かすためには、生徒が評価の仕組みを理解し、評価結果を妥当なものとして納得することが重要です。学期末や学年末に通知表を通して評価結果を知らせる際に、「どのような経緯を経て評価されているのか」「なぜ、そのような評価結果となるのか」などを十分に伝えることが求められます。

特に評価結果について説明する場合に、評価に活用した資料や具体的な記録等をしっかりと残しているかどうかが必要になります。

生徒の学習意欲を喚起し、保護者の理解と協力を得るためには、評価にかかわる適切な情報提供を行うとともに、学習の評価がおおむね妥当であると判断できるものであることが大切です。



(1) 生徒の理解を得ること

生徒が教員から評価された結果について、十分に理解し納得することは、主体的に学習活動に取り組む一つのきっかけとなります。そのためには次の点に留意して、生徒への理解を図ることが大切です。

- ア. 生徒が自分自身への評価を十分に理解し納得することができるように、評価結果だけでなく、各教科の目標や評価規準、「判断基準（評価基準）」等について、わかりやすく説明すること。
- イ. 生徒自らの学習課題を意識することができるように、自己評価や相互評価の機会をつくること。
- ウ. 学習課題を意識して学習に取り組むことができるように、めざすべき具体的な目標や学習の方向性を示すこと。
- エ. 学習課題の解決をめざして、生徒自らが学習方法などを選択し、学んでいくことができるように、学習活動の過程において、適切な評価や指導・支援を行うこと。

(2) 保護者の理解を得ること

保護者の理解と協力を得て家庭学習の支援を促すためには、評価にかかわる適切な情報を提供し、各学校の考え方を十分に理解してもらい、納得してもらうことが大切です。

- ア. 各学校の評価の考え方、評価の仕組み、評価の方法等について説明する機会を設けること。
- イ. 生徒の評価について「課題は何か」「課題をどのように解決するのか」「生徒の学習をどのように支援していくのか」などについて共通理解を図ること。

<参考資料>

学習評価の工夫改善に関する調査研究（国立教育政策研究所 平成 16 年 3 月）

高等学校学習指導要領（文部科学省 平成 21 年 3 月告示）

評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（国立教育政策研究所 平成 24 年 3 月）

中学校における学習評価に関する参考資料（大阪府教育委員会 平成 25 年 7 月）

新しい教育評価入門（西岡加名恵・石井英真・田中耕治 [編] 2015 年 4 月 有斐閣）